

## モラルの確立に資する経済とは

大阪ガス株式会社  
エネルギー・文化研究所  
豊田尚吾

### モラルとは「了解」すべきもの

モラルとは、個人や社会の危機を顕在化させないための“仕組み”である。それ故モラルは現実と結びつかざるを得ないし、時間・空間をまたいで普遍的なモラルなど意味はない。モラルとは論理的に「理解」するものではなく、「了解」するものである。了解とはわかる（合点がゆく）ことであり、心から納得がいくということである。よって、その人がわかる範囲でしかモラルは存在しない。逆に言えば誰でも、自分が了解できる範囲のモラルを持っている。各人のモラルを調和させられないと、社会の危機が顕在化する。それはモラルがその社会で機能していないことを意味する。モラルを機能させることを、社会を持続させることと言い換えれば、そのためには、今そこにある現実そのものという意味での「リアリティ」を、多くの者が共有するしかない。リアリティの中でしか、「今」了解可能なモラルは実感できないからである。

例を挙げよう。本年1月26日、インドで大きな災害が起こり、多くの方が被災された。6年前の震災に遭遇した筆者は、インドの方々が直面するリアリティを共有せずにはいられない。インドの災害に少しでもコミットすることは、筆者自身のモラルである。これはまさしく、心から了解可能なモラルなのである。しかし、だからといって、日本人全員が、自分と同じモラルを持つべきだとは思わない。何がリアリティのあるものなのかは、個人個人の事情による。共有可能なリアリティがあってこそ、現実裏打ちされた、実効あるモラルを見いだせるのだ。

### モラル・サイエンスとしての経済学

リアリティの共有が重要だとすれば、「経済」及びその背景にある経済学は、モラルの確立に大きな影響を与えていることになる。現在主流の経済学における、合理的経済人の「仮定」は、ともすれば倫理と混同されがちである。それは私益の追求を前提とすることで、個人を他者から切り離し、リアリティの共有を妨げる。典型的な例が拝金主義である。もちろん経済学が拝金主義を擁護しているという事実は全くないが、少なくとも現実にもそのような影響があることは否めない。モラルの確立という面だけから見れば、経済学を背景とする「経済」活動は、必ずしも望ましい影響を社会に与えていない。

学問の、様々なディシプリン（分野）への分化は、一方でより深い真理の探究を可能にしたが、他方でモラルとの距離を広げてしまった。特に経済学でそれは顕著である。かつてケインズやハロッドは、経済学をモラル・サイエンスと捉えた。これは万人に受け入れ

られる考えではないかもしれないが、今でもその重要性を強調する声は根強い。モラル・サイエンスとしての経済学が再認識され、実践的な経済活動とリアリティを共有することが、上で述べたような課題の処方箋になりうる。なぜなら、そこでは合理的経済人の考え方がモラルではないことが、明確に意識されるからである。しかし、経済学が一つのディシプリンになってしまっている現在、「理解」を越えて「了解」の領域に踏み込もうとする専門家は希である。モラルという視点から見れば、残念ながら経済学は制度化されすぎた。学問を生業とする職業的研究者にとっては、モラルへのコミットは、研究者としての評価を低めるという意味で、リスクが大きすぎる。しかし希望は別のところにある。

### リアリティを持つ社会人と学識者とのコラボレーションを

可能性の一つは教育の多様化の流れであり、もう一方は情報技術の発展である。近年、大学や大学院で、もう一度教育を受けようという社会人が増えている。それは直接的には自分の市場価値を少しでも高めようという、生活防衛的な動機に基づいたものであるかもしれない。教育機関にとっては経営戦略上の生き残り策であるかもしれない。しかしそれは図らずも、社会のリアリティと学問との新しい出会いの場になっている。そこでは社会人と研究者の間にコラボレーション（共同）が起こり、モラル・サイエンスへのコミットが促されよう。なぜなら、彼らは制度化された経済学に縛られることがなく、むしろ現実への適応に迫られているからである。さらに現在の情報技術は、彼らのアウトプットを全国に情報発信し、ネットワークを広げていくことを可能にしている。現実に政策系NPOの提言などに、そのような実例が出始めつつある。

拙稿で述べたような取組は、とるに足らないことのように思えるかもしれない。しかし、我々は、多くの人とリアリティを共有するためのコミュニケーションの術を未だ持っておらず、「地球人のモラル」を一気に展望することは困難である。今できることは、そのための第一歩を踏み出すことなのであり、「経済」がモラルに踏み込む意義は大きい。

志高き社会人は、リアリティと問題意識を携えて、再び学舎に向かうべし！これが結論である。

以上